

ア ス ク

Advise and Support Care services

介護サービス相談サポートセンター
福祉サービス第三者評価機関
地域密着型サービス外部評価機関

アスクニュースレター No. 53

2014年7月25日

発行 特定非営利活動法人アスク
発行人 佐藤由紀子

〒325-0074 栃木県那須塩原市松浦町118-189

TEL/FAX : 0287-62-4310

E-mail : npo.asc@nasuinfo.or.jp

web : http://asc.nas.ne.jp/

評価者からのメッセージ

サービス業の言葉づかい

山口君子（やまぐちきみこ）

アスクに関わり始めて何年になるでしょうか。

介護より子育てに悩み戸惑う、そんな頃にアスクの初期メンバーと出会いました。「これからは介護問題が大きな社会問題となってくるはず、とにかく学びましょう。」この様に言われ、耳にする単語が頭の上を素通りする勉強会に参加したのは20年以上も前の事です。彼女達は積極的に介護制度・介護問題に関わることで力をつけて、アスクを背負ってきました。

私といえば、福祉に関心はあるが、経験のない介護の現場に飛び込む勇気をもたず、さりとて全く関係のない職場につくことも出来ず、中途半端な関わり方を続けてきました。

そんな私も今回外部評価調査員の研修を修了し、調査員としての一步を踏み出しました。その研修で評価とはサービスの質を向上させるお手伝いをする事と知りました。

サービス業のサービスと介護現場のサービスでは何か大きな違いがあるのでしょうか。

一般にサービス業は言葉づかいをととても大切にします。高飛車な言葉や押しつけがましい言葉、例えば「・・・なさってください」、「このままお待ちください」等です。

サービス業の職場では、接客に使用してはならない言葉を書き出し、全員で認識することが大事です。この様に書いた本を読みました。使用すべき言葉ではなく、使用してはいけない言葉を知ることに意味がある。相手を傷つける意味あいの言葉を無意識に使うことを避ける為なのです。言葉はとても大切です。相手を傷つけない言葉、相手の思いを引き出す言葉、相手を幸せにする言葉、そして時には口を閉じることも大切です。

接客業のプロの様に書いてしまいましたが、今色々な業界で接客革命が起きていると聞きました。人が人と接する態度に業種は関係ないと思います。スタッフの接客態度、人手不足や忙しさを理由に低下してはならない事です。

以前に「正義で人を攻めるな」この言葉を教訓にしていると書いた方がいました。私もこの文章を読み、心をゆっさゆっさと揺り動かされた一人です。正しいことが常にベストとは限らない。高齢者は特に「正しさ」より「幸せ」をえらぶことが多いのではないのでしょうか。

このようなことを頭におきながらサービス向上のお手伝いを行っていきたいと考えております。

（地域密着型サービス外部評価調査員）

社会・経済格差、貧困・孤立、虐待・育児放棄、DV、家庭崩壊... 様々な問題に直面する子どもと親や家族がおり、見過ごしにできない状況の家庭が増えています。そうした子どもと家庭に対し、県内で実際に相談支援に当たっているNPO法人だいじょうぶの代表畠山由美さんと那須塩原市保育園園長として子育て支援に携わっている八木澤明美さんを講師に迎えて、公開学習会「今の子どもたちと子育て世代の困難、地域での支援のあり方」を開催しました。その報告に替えて、NPO法人キッズシェルター理事西田由記子さんと八木澤さんに文章を寄せていただきました。

新しい一歩 — 公開学習会に力を得て

西田 由記子

5月11日、アスクの総会に続いて、公開学習会「今の子どもたちと子育て世代の困難、地域での支援のあり方」に参加しました。アスクはいつも、私が今一番聞きたいと心の中で思っていることを勉強会のテーマに取り上げてくれるので、びっくりするとともに、本当にありがたく思っています。今回もまさにそうでした。勉強会のまとめをすることは私にはとてもできそうにないので、勉強会に励まされ、一歩踏み出そうとしている自分のことを書くことにします。

NPO法人キッズシェルターの活動

「ひとりでがんばらないで 応援します！あなたの子育て」これは、私がメンバーとして関わっているキッズシェルターのキャッチフレーズです。キッズシェルターは、虐待の予防活動を含んだ子育て支援を行おうと小児科医、臨床心理士、助産師、保育士、里親、主婦と一緒に考え、平成15年に立ち上げたNPO法人です。虐待してしまうのは母親が多いという現実を知り、当初は、年齢を問わない託児付育児セミナーの開催と理由を問わず24時間いつでも低料金で子どもを預かることを柱としてきました。平成16年4月からは旧西那須野町から委託を受け、子育て短期支援事業の1つであるショートステイ事業が始まり、那須塩原市に合併後も現在まで続いています。

ショートステイを利用する理由は十人十色で

すが、そのなかで出会った子どもたちは家庭にさまざまな困難を抱えていることも多く、なかには「食べること」「体を清潔に保つこと」などごく当たり前の生活すら事欠く子どもたちも少なくありませんでした。保育園、小学校、中学校と集団生活に入っていくなかで、これらが大きなハンディになっていること、あるいはこれからハンディになっていくことが予想され、関わってきた子どもたちの行く末を案じてきました。虐待のなかでもネグレクトは、外へ現れにくく、ネグレクトの子どもたちの多くは家庭にとどまっています。貧困や虐待は世代間連鎖することを肌で感じ、何とかこの連鎖を断ち切りたいと願ってきました。

平成21年4月からはもう一歩踏み込んだ支援はできないかと、法人の自主事業として訪問型子育て支援を始め、ハイリスクな家庭を中心に利用者負担なしで食事支援・家事支援等を行ってきました。そのなかで、子どもたちに対しては、食事や入浴を行うことはもちろんのこと、体操着や給食着、上履きの洗濯や、学校の準備など、より細やかな支援が必要だと痛感してきました。

キッズシェルターは昨年10周年を迎えました。多くの出会いがあり、多くの人たちに支えられ、活動を続けてきました。しかし、これまでの支援のやり方に限界を感じ始めてもいました。長い目で見て子どもたちのために

なる支援は何か、自分たちが願う支援がどうしたら形にできるのか……。次へ一步踏み出そうとしていた私たちをこの公開勉強会は後押ししてくれました。

公開学習会から

公開学習会は、お二人のゲストスピーカーをお招きして行われました。日光市のNPO法人だいじょうぶの理事長の畠山由美さんと那須塩原市の市立保育園園長の八木澤明美さんです。お二人は、困難な状況にある子どもたちとその家族を地域のなかで支えるまさに最前線にいます。

畠山さんは日光市で子どもへの虐待防止を目的に2005年にNPO法人だいじょうぶを立ち上げ、母子の居場所「Your place ひだまり」など2か所を運営し相談支援業務にあたっています。活動を進める中で自分たちが必要だと思う支援を自分たちの手で次々と作りだしてきた畠山さんたちのパワーは本当にすごいとしか言いようがありません。八木澤さんはもっともっと身近、私が住む地域の先生です。保育園では今、子どもを保育するだけでなく、子どもが育つ基盤である家族全体を支援するという役割がますます大きく、重要になってきていること、そしてそれが保育現場の地道な努力によって支えられていることを改めて感じました。

平等であることとは・公平であることとは

お二人の話を聞いて、私は「平等であること」「公平であること」って、どういうことなのだろうかと改めて考えさせられました。「その子にだけそんなことはできない」という言葉をよく聞くことがあります。「ある子どもにだけやってあげるのでは不公平だ」と。しかし、みんなに同じように与えることだけが平等でも、公平でもないのだろうと私は思います。子どもたちみんなができるだけ同じスタートラインに立てるようにするという。そうすることもまた、平等であり、公平なのではないでしょうか、そのためにはより多く

の手助けが必要な子どもたちがいます。八木澤先生のお話の中に、「保育園から小学校へ支援がなかなかつながっていかない。学校にももっと福祉的な見方があれば……」とありました。学齢期の子ども3人の母であり、学校の先生方の多忙さを目の当たりにしているので、1つ1つの直接的な支援を学校に求めるのは少し酷な気がしています。「平等」「公平」という壁も学校に多くあるように思います。しかし、子どもたちの困難さが一番見えるのは子どもたちと1日の多くの時間を一緒に過ごしている先生であり（親よりも長くいるかも）、福祉的な見方をもつことによって、直接的な支援は無理でも、支援の担い手へとつないでいくことはできるのではないかと思うのです。「福祉」と「教育」の連携、かつこいい言葉ですがとても難しい、でも一番に乗り越えなければならない課題です。

下野新聞の連載

今年1月「子どもの貧困対策の推進に関する法律」（子どもの貧困対策法）が施行になりました。この法律は、「子どもの将来がその生まれ育った環境によって左右されることがないように、貧困の状況にある子どもが健やかに育成される環境を整備するとともに、教育の機会均等を図るため子どもの貧困対策を総合的に推進することを目的とする」とあります。折しも下野新聞では、今年1月から半年にわたり「希望って何ですか 貧困の中の子ども」（子どもの希望取材班）と題して連載がされ、子どもの貧困という問題が多くの人目に留まることになりました（*）。この連載を読んで初めて、今の豊かな日本にあってこのように貧困の中で生きる子どもたちがいることを知ったという人も多かったのではないかと思います。畠山さんたちの「だいじょうぶ」の活動も、連載の「第3章 重なる困難 差し伸べる手」で詳しく取り上げられています。6月24日には、1面に連載のまとめとして子どもの希望取材班の五つの提言が掲げられ

ました。その第一は、見えにくい「子どもの貧困」、その存在の認識を、第二は、発見、支援の最前線の充実を図れ、です。

* www.shimotsuke.co.jp/special/poverty

にじのいえ

本年度、宇都宮市、小山市、そして那須塩原市が、要支援児童放課後応援事業を始めることになりました。もちろんモデルとなっているのは「だいじょうぶ」の「Your place ひだまり」です。そのなかで私が住む那須塩原市では、運営団体の公募があり、先日NPO法人キッズシェルターが運営を行うことに決まりました。7月14日に私たちの居場所、「にじのいえ」がOPENします。小中学校に通う子どもたちが、放課後ここに来て遊び、宿題をし、お風呂に入り、夕食を食べ、過ごします。衣類の洗濯もここでします。この事業の目的は、子どもたちが自分たちでできることは自分たちでできるようにする、生活の

中で自分たちでできることを増やしていく、子どもたちの自立に向けての支援だと理解しています。しかし、まずは「にじのいえ」が子どもたちにとって「ほっとできる場所」「ありのままでいられる場所」になる必要があります。「ただいま」と帰ってきたら「おかえり」と迎えられ、話をしたいときには話に耳を傾けてくれる、のんびりしたいときにはのんびりさせてくれる、自分たちが受け入れられていると感じられることがまずはスタートです。ここで子どもたちと一緒に生活をしていきたいと思っています。

正直やってみないとわからないことばかりです。でも、これまで同様相手の「困った」に寄り添う支援の先に道はあると思っています。

「子どもが変わっていくことで家族も変わっていく」という畠山さんの言葉を励みに頑張っていきたいと思います。

(NPO法人キッズシェルター理事、アスク会員)

地域における保育園の役割とは

八木澤 明美

近年子どもとその家庭を取り巻く環境は、少子化・核家族化、虐待を含め人間関係を中心につながるの喪失と倫理観の欠如を引き起こしている気がする。その影響で地域や家庭での育児機能が低下し、子ども同士が接する場が限られ社会性を学ぶ機会が大幅に減少している。

子どもにとってのより良い子育て環境を確保する為に、保育園・家庭・地域が、今何をすればよいのか何ができるのかを考えてみる必要があるのではないだろうか。

保育園の仕事は、子どもの発達を促す様々な保育業務と保護者支援の2つが主なものとなる。親子の情緒の安定には相互作用があることから、子どもの育ちに大きく影響を与える家庭環境を適切な状態にすることが重要となってくる。

まず保護者支援について考えてみる。子どもの最善の利益を守る為保育技術を駆使し子ども・保護者を支え、安定した親子関係や養育力の向上を図り子育てしやすいやさしい社会を目指すことだと私は理解している。

保護者支援は、保育士自身が保護者支援技術をしっかり身につけることが必要であり、地域の社会資源の活用も視野に入れ行わなければならない為大変難しい。また、実際に取り組む過程において、異なる価値観や方法を認め受容しなければならないという葛藤や思うように進まない支援に無力感を感じ、自分自身と向き合わなければならないこともあり、保育士の高い資質が求められる。

保護者支援は保育士（保育園）の思いで動くのではない。子どもや保護者の行動の意味をじっくり見てどのように理解するかで支援

そのものが変わってしまう。様々な家庭環境の子どもたちを見ていると、問題の本質を捉え専門性を生かした保護者支援とは何かを園内でもっと学習し実践的な保育技術を磨かなければと焦りを感じてしまう。

子どもの気持ちに寄り添った保護者支援を可能にするには、子どもに向き合う職員全体の資質の向上が必要となる。そこで、今私が考えている保護者支援を含めた保育園運営の基本は以下のような内容になる。

1. 保護者を支援する職員の情緒の安定を図る

多様な保護者ニーズと保護者支援に応じられる職員集団を構築するには、職員自身の情緒が安定していることが大切になる。保育園では先生・家庭では母親役ができるよう気遣うことが私の役割だと考えている。親子は良い関係性の中で育っていく。職員も例外ではない。保育に支障がない範囲で母親役ができるような体制作りができれば、家庭（子育て）と仕事の両立ができ精神的に安定した状態で子どもに向き合うことができると思う。心身ともに健康な状態でこそ、親子の抱えている問題の本質を捉え適切な保護者支援が可能になる。また、職員ができるだけストレスを溜めず、分からないことは分からないと背伸びせず言えるような職場環境も、職員の気持ちの安定に大切だと考えている。お互いが無理のない等身大の自分を出し合い支えあいながら保育にあたることで、保護者の持っている潜在的な子育て力を引き出せたら、親子関係はきっと安定していく。

2. 柔軟な心を持つ職員

保護者の厳しい要望や難しい家庭状況に対応できる柔軟な心を持ち親子の成長を見守る。保護者の要望に対し気持ちに余裕がなかったり、前例がないケースだったりすると最初から「だめ」と言ってしまうことがある。しかし、規則や規約により要望通りできない場合でも、「ダメ・できない」と最初から決めつけず「相談する時間を下さい」と一度受け止め

る形で保護者の話を否定せず最後まで聞く。また駄目と良いのどちらかを提示するのではなく、柔軟に妥協案をいくつも提示することで保護者の気持ちを動かしていく。さらに傾聴し受容する事とすべてを肯定する事の違いを理解し対応する事も重要性になってくる。

3. 職員の力を信じる

管理・統制が厳しいと、職員がオドオドしてしまい自由な発想ができないと考えているので、一定のルールの中で各自が持てる力を十分に発揮していく方法を探っていきたいと思っている。

一人の感情が職場の中で連鎖し職場全体の空気感を作っていく、元気でいきいきとした職場を形成する為に小さな問題が大きくなる前に対応し、ほどよい緊張感の中で働けるようにしたいと思っている。子どもの特性に合わせ職員数が増え子どもの共通理解、職員間の仕事配分等対応の難しい一面はあるが声を掛け合い円滑に回るよう努力することで、前向きな気持ちの連鎖を作り仕事への向上心へつなげたい。大人になっても誰かに期待され信じてもらうことで、一人一人の子どもの育ちを真剣に話し合い、思いやりを持ち保護者を受け止めどう支援するか具体案を考えられる職員になっていくと考えている。より良い保護者支援の実現につながるよう私は職員の力を信じたい。

まだ他にも保育園運営・保護者支援の基本姿勢はあると思うが、常日頃考えていることは上記のような内容になる。園内の運営だけで今は大変な状況にある。日々積み上げている保育内容や保護者支援が保護者自身の力で情報発信されることで、間接的に地域への働きかけになればと考えている。

まとまりなくいろいろ書いてきたが、子どもの笑顔に支えられながら、保護者や職員にできるだけ多く「ありがとう」の言葉を言い出合いに感謝しながら働き続けたいと思っている。
(那須塩原市わかば保育園園長)



ヘイトスピーチとたたかう！

日本版排外主義批判

有田 芳生 著 岩波書店
1620円 2013年9月発行

ヘイトスピーチ、それは差別を煽りたてる排外主義的デモ。2010年ごろから、東京新宿区の大久保界隈で、繰り返し行われるようになったというデモ、それは、「朝鮮人を殺せ、出て行け」という過激なものでした。

ネットで世界中に配信され、日本の排他的な一面を強く印象付けることになったこうした「差別扇動」運動。誰がどういった形でこの運動をしているのか、そして人々はそれにどう対応したのか。衝撃的な内容ですが、著者自身がこうした差別運動と戦いながら人間の行動というものを冷静に分析し、読みやすくわかりやすく書いた本です。

この本が書かれたときより、さらに日本と韓国の関係は悪化しました。日本の悪口を世界に触れ回る韓国の政権に対し、日本は右翼化が進んでいるのかと取られかねない言動を、総理とその周辺の人たちが繰り返しています。

今こそ私たちは、こうした本を読み、あらためて知らなくてはならないと思うのです。真の意味での言論の自由、そして差別することの醜さを。

有田芳生(ありたよしふ)1952年京都生まれ。フリー・ジャーナリスト、2010年から参議院議員(民主党)。2007年まで日本テレビ系の「ザ・ワイド」に出演。著書には『私の家は山の向こう テレサ・テン十年目の真実』(文藝春秋)、『「コメント力」を鍛える』(NHK生活者新書)など多数。

ルポ 産ませない社会

小林 美希 著 河出書房新社
1728円 2013年6月発行

妊娠解雇、職場流産、孤立する妊産婦、激務のため次々と職場を去る産婦人科医や小児科医。少子化を問題視はしても、現実には産む側である女性の悩み・苦しみに向き合えない今の日本。この「産ませない社会」を変えていくにはどうしたらいいのか?豊富なデータと事例を挙げながら、現代の労働環境や社会環境を鋭く告発した作品。

正職に就けない若者、そのために遅れる結婚。高齢によるハイリスク出産。それを受けとめきれない医療の現場。出産も育児も孤立化し、悩みを抱える母親たちの育児放棄、などなど、ここまでたくさんの事例を集めた筆者に脱帽です。

周囲から祝福され、幸せに満ちた出産、というものはもう遠い昔のことなのでしょう。

子どもが生まれず人口が減り続ければ、国は疲弊してしまう、そのことは誰もが知っているはず。それでも妊娠を迷惑と捉える職場は、何か問題を抱えた場所なのでしょう。

常に女性ばかりがこうした被害にあう現実も、本当に腹立たしいことです。先進国でありながらいまだ男性中心社会の遅れた国なんですね。日本は。

妊婦である女性、助産師や産婦人科医、そして小児科医までが苦しんでいるこの負の連鎖を、断ち切ることはできないのか?その答えは終盤に書かれています。

今私たちは、本当に余裕のない生き方をしているように思います。原点に帰って、人間の幸せというものをもう一度考えてみたい、そう思わせてくれた一冊。おすすめです。(H. K.)

小林美希(こばやしみき)1975年生まれ。労働経済ジャーナリスト。株式新聞社、毎日新聞エコノミスト編集部を経て2007年2月からフリーのジャーナリスト。『ルポ“正社員”の若者たち』(岩波書店)、『看護崩壊』(アスキー新書)、『ルポ職場流産』(岩波書店)など

ケアマネさん、あなたのひとりごとを聞かせてください！

「医療との関係不足」といわれても・・・

このところ受験資格が福祉系のケアマネへの風当たりが強いようです。「医療系の知識が不足しているため医療との連携が上手にとれない」「医療知識が不足しているから、適切なケアマネジメントが出来ない」などなど。確かに基礎資格が看護師のケアマネと比べ医療知識が少ないのはどうしようもない事実ですけど、私達なりに研修など積極的に出て勉強しています。アセスメント力を磨くため日々努力しているのです。

…そもそも福祉と医療の連携がうまく図れていないのは福祉系のケアマネだけの責任？…

地域包括ケア推進のため国も医療・福祉で連携を図ると医療・介護それぞれの報酬に加算を付けるなどしたことで、今は退院前に病院から連絡がありカンファレンスをするが増えましたが、医療機関の中には未だに介護サービスに対する理解が薄く、連携するという意識さえない所もあります。退院さえすれば介護保険サービスでどうにかなるでしょ、と突然退院を決められ、連携もなく、ケアマネが駆けずり回り必要な支援体制を取るなんてことも、残念ながらよくあることです。

私の担当しているAさんが大腿骨骨幹部骨折で入院しました。要介護4、認知症で言語での意思の疎通は困難ですが、ベッドから車椅子に移る時など数歩なら介助で歩ける方でした。一人で介護していた息子さんによると「竹をねじって折ったような骨折と先生に言われた」そうで、骨折が治ってもリハビリが必要だし、直ぐの退院は難しいと思いました。

1ヶ月後「4日後に退院が決まった」と息子さんから連絡あり、あわてて病院に面会に行きました。右腰から右膝上までのコルセットを付けベッドに横たわるAさんの姿が。担当看護師から話を聞いたところ仮骨がやっとでき始めた段階で「患側の足を床に付くことは禁止、右に傾ける事も左に傾ける事も禁止、ベッドから車椅子に移る時は4人掛かりでシーツを持ってやっていますが、退院しても問題ないです」。ええ～！まだ治療が必要な段階じゃないの？と思ひ色々質問しても「退院して、後は通院で大丈夫です」との返事ばかり。仕方なく在宅の病状管理で願する訪問看護の理学療法士や看護師、福祉用具相談員の方たちと病院を訪問し、サービス調整し退院して頂きましたが、その間一度も病院から連携の働きかけはありませんでした。

これからのケアマネは医療にかかわる知識やリハビリの身体機能に関する見識を更に身に付け、それらを消化した上でケアプランに反映させる能力が求められるようです。

書類作成や訪問、サービス調整で時間が足りないと苦労している私は『う～ん、ハードル高いなあ。勉強しても勉強しても頭残んないし』と言いながら、今日も研修会参加の申し込みをしています。

(ケアマネージャー)

アスクの活動から

外部評価・福祉サービス第三者評価活動

《地域密着型サービス外部評価》WAM NET (<http://www.wam.go.jp/>) に評価結果公表

- ・認知症対応型共同生活介護：ホームタウン宝木（宇都宮市）、ラパス、ヴィエント（矢板市）、レガーロ（那須塩原市）、こころ黒羽（大田原市）、アベーテ（那珂川町）
- ・小規模多機能型居宅介護：ホームタウン上河内（宇都宮市）、ひだまり（那珂川町）

《福祉サービス第三者評価》とちぎ福祉サービス第三者評価推進機構HP <http://www.tfhs.jp/>

- ・那須塩原市と宇都宮市の公立保育園、私立保育園の評価を実施中です。

《社会的養護関係施設第三者評価》

全国社会福祉協議会HP <http://www.shakyo-hyouka.net/search/index.php>

- ・児童養護施設、母子寮、情緒障害児短期治療施設等の評価を実施中です。

アスク定期総会

5月11日（日）、アスク総会を開催し、2013年度事業報告・決算、2014年度事業計画・予算および役員改選（8名全員留任）が承認されました。会員には総会資料をお届けします。

公開学習会「これからの地域密着型サービス～ケアプランから考える～」

6月21日（土）那須塩原市で、グループホームと小規模多機能型居宅介護事業者、アスク地域密着型サービス外部評価調査員総勢40名が集まり、那須塩原市高齢福祉課の職員から介護計画について学び、後半はグループに分かれて情報交換を行いました。今後もこのような集まりを実施し、事業所と外部評価調査員、行政が共に学び合い、よりより高齢者支援ができる環境を作っていきたいと考えております。

インフォメーション

新しい地域支援のあり方フォーラム

開催日時：2014年8月19日（火）13：30～17：00（13：00開場）

会場：とちぎ福祉プラザ 多目的ホール（宇都宮市若草町1-10-6）

参加費：無料（定員300名、8月11日参加申し込み締め切り）

参加申込：栃木県社会福祉協議会福祉部地域福祉・ボランティア課

FAX 028-621-5298

主催：公益財団法人さわやか福祉財団 NPO法人地域ケア政策ネットワーク

第1部 基調講演

テーマ 「(新) 地域支援事業の解説」

講師：厚生労働省老健局振興課地域包括ケア推進係 係長 山田 大輔氏

テーマ 「地域支援事業で必要とされる各市町村の新たな取り組み」

講師：公益財団法人さわやか福祉財団 会長 堀田 力

第2部 パネルディスカッション

〈パネリスト〉・栃木県保健福祉部高齢対策課 課長 石崎 金市氏

・社会福祉法人 日光市社会福祉協議会 事務局長 齋藤 博文氏

・ひだまりサロン みどりの家 代表 安宅 ミチ子氏

・NPO法人 ワーカーズコレクティブ たすけあい大地 理事長 中手 淳子氏

・NPO法人 グループたすけあいエプロン 事務局長 菅野 忠雄氏

寄稿 歓迎

◆次号のニュースレターは10月発行予定です。読者からの情報や投稿を歓迎いたします。

◆書籍紹介欄に取り上げるのにふさわしい書籍をご紹介下さい。新本、旧本を問いません。400～800字程度の紹介文を付けていただくとありがたいです。

◆原稿はニュースレター発行元へ、9月末までにメール又はFAXでお送り下さい。